第２１１号

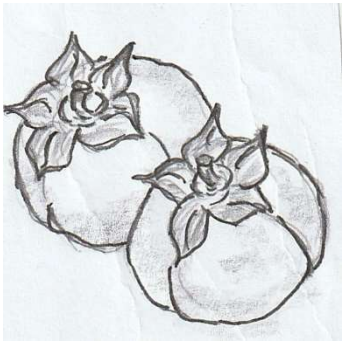
芥川だより

発行日＊２０２４年８月１日　e-mail: ab_879686240@yahoo.co.jp
最新号から創刊号まで閲覧できます。 http:// akutagawadayori.sakura.ne.jp/

編集　　川口　伸
発行 人　　下村嘉明
〒661-0951
尼崎市田能5-3-10-601
☎090-8796－8624

＊＊＊＊＊＊＊＊ 一部２００円です ＊＊＊＊＊＊＊＊

妙な色気を感じさせる女



プレハブ作りの小さな作業員の詰め所がマンションの駐車場の一角につくられている。私は、一番早く来て８畳ばかりの部屋の奥の片隅に荷を下ろし着替えをする。椅子に腰かけ持参した飲み物を少し飲む。まもなくして塗料にまみれたジーパンと作業着を着た女が無言で入ってくる。すぐに若い男たちが３人ほど入ってくる。この男たちの中に丸坊主のイケメンがいる。両腕にはタトーを入れ粋がっている若い男だ。めったにしゃべらないが、しゃべるときは、決まって若い新人がいる時だ。チンピラのように威喝しながら吠える。

作業員の面々は、何でもありのような掃き溜めだ。タトゥーを入れているのは、珍しくなく背中に見事な色合いの入れ墨をわざとらしく見せるものもいる。年配の監督に言わせると、わしも若い時は、入れたかったが、親に泣きつかれてやめたが、今では入れずによかったと思っているが、娘がタトゥーをいれて喜んでいるので、何がええのかわからない。詰所の近くを歩く人の幾人かに、入れ墨を腕や足に見るから流行っているのだろう。

塗装屋の女は、美人でスタイルもよい。年も若い、どうしてこんな場所にいるのか不思議でならない。最近、作業員の中に女性が少しずつ増えてきたのも事実だが、彼女の事情は少し違うように感じた。関係者以外とは口をきかず沈黙を通している。こんな若さで自分から進んでやるような仕事でもない。

相変わらず、現場は３Ｋ であるからできればやりたくない。やらざるをえない事情があるに違いない。工事が一区切りした時に、彼らの親方が次の現場へは来なくてよいといったらしい。作業員たちが別れ際に、ほとんどの作業員が親方の車に乗ったが、イケメンの男と女は、二人そろって違う車に乗った。その時、私は、女の色気はイケメンに惚れているためだと直感した。女の考えることは全くわからない。後日、聞いた話では、イケメンの男の塗装作業は手直しばかりで作業員としては使い物にならなかったそうだ。美人の女はこれから苦労するだろうな。

死をめぐるあれやこれ（１１６）　石川　吾郎

南海トラフ

恐れていたものが来た。八月八日に日向灘で起こったマグニチュード七・一の地震だ。政府は初めて「巨大地震注意」を発した。この地震が南海トラフ巨大地震と同じメカニズムで起こったことが明らかになったからだ。南海トラフ地震は、かねがね発生することは分かっており、政府は二千三十年代までに七十から八十％の確率で発生し、犠牲者三十万人、国家予算をはるかに超える二百兆円以上の被害額を予想している。◆これほど被害が大きいのは東日本大震災の地震より規模は大きくはないが、国土の間近で起こり、人口は東北とは比較にならぬほど多く、わが国の中枢となるほぼ全域にダメージを与えるからだ。本来なら地震被害予防内閣とでも呼ぶべき態勢を作り被害予防縮小に最大限注力すべきだが、政府は正面から取り組む姿勢のようには見えない。個人への注意喚起で事足れりとしているようだ。◆南海トラフ地震は歴史的に、時代の変化にも深く関わっている。江戸末期一八五四年に二日連続して起こった巨大地震は、江戸幕府崩壊の一因にもなっているという。◆個人的には、古希を過ぎた老生は、できるなら自分が生きている間に起こってほしくないと思っていたが、今回の地震で自然のモードが変わった。自分がこの巨大地震を経験することがほぼ確実になったように思われる。さてこの状況に取り組むには、どうすればいいものか。ともかく

ともかく人様にご迷惑をかけないように、家具の固定や必要な備蓄などを着実にしておこう…。

芥川だより二一一号　目次　ページ

巻頭エッセイ	下村嘉明	1
巻頭コラム116	石川吾郎	1
素老人☆よもだ帳　125	坂本一光	2
哲学爺いの時事放談75	祖蔵哲	3
大峰奥駆道81	下村嘉明	5
ボケ老人の雑話　その4	明石幸次郎	5
オクラの山たより95	因了生	7
隠された歴史70	満田正賢	9
俳句	影山武司	11
編集後記	SK生	11
ふみの道草74	山椒魚	12

素老人☆よもだ帳（125）

坂本　一光

◆内藤凡柳百句選集

大宇宙蜘蛛は小さな網を張り
お説教うつらうつらと有難し
晴れる雨もとの姿の山にする
持てあます体に昼の風呂があり

世渡りの中にお蔭という言葉
生まれきた裸のほかは世のめぐみ
世の母の心の中の観世音
湯の町の春は他国の訛りから

回り道出世する子の枕許
君が代のあの荘重を恋うも齢
よき伴侶とはユーモアのわかる妻
逝った父を惜んでくれる立ち話

そばで暮れ雑煮で年が明ける国
食うでなくいただく茶碗正座する
俄雨旅の土産となった傘
子を叱る妻にも虫の置きどころ

家事の都合よい省略のある日本
一生の不作は妻の方もいえ
運が向くとは監督の眼にとまり
生むという弱さと強さ女もつ

ひとくせのある字個展の芳名簿
バカですみませんと一枚妻が上

山がそこにあるから登る無分別
今どきにほしい人物太郎冠者

陽と雨の詩情見捨てたアーケード
日向は馬潮来は舟で来た嫁御
初恋を鼓動いちばん先に知り
人間になろう日が暮れ陽が昇る

加茂川で生きる舞妓と友禅屋
好きといえる恋万葉でなくてよし
いつからか妻のものなる主導権
流れ去った日本の姿忠魂碑

紙の白さを日本画は雪にする
地球は一つ国境のない渡り鳥
でぼちんにてのひら母の検温器
この上もない日本語のおめでとう

男親の愛むかしから肩車
叩かれてもよしホームラン打った尻
しずけさが森にしみ入る普茶料理
地球はまるい羽田発羽田着

初恋のひとふるさとに年をとり
人間の飾り男に乳があり
しあわせな絵になる雲が富士へ来る
いつまでもすこやかであれ賀状の字

詩をうたと読む国がらに四季めぐる
春泥と書かれて泥はこそばゆし
考える葦人間に秋深む
無から有を生む十七字わがいのち

おかげさまとは美しい日本語
百歳になると知事さん逢いに来る
自動ドア人に貧富の差をつけず
漁火のまたたき天も地もねむる

好きだった唄口ずさみ年が知れ
アンツーカー空と芝生の色と組み
人生の黄昏れる音骨が鳴る
日本の風流の音鹿おどし

高度成長もったいないを死語にする
咲き稔る母なる大地父の天
作家生きる男と女あるかぎり
両の手に宇宙も愛もみな這入り

天平の仏の眉をおんな描く
人間にかえって自然歩道ゆく
大自然花は出番を間違えず
日の丸に風あってよしなくてよし

北斎と広重を生み富士そびゆ
風呂敷の伝統からくさを捨てず
お東にお西お茶にもうらおもて
日日好日こころの窓をまるく開け

普茶料理心に舌に禅を噛む
幾山河人生に得た和の一字
わたくしの辞書に余生の字をはずす
しあわせも創作向こうからは来ず

一身上の都合は日本語の妙味

今にしておもう水府のハガキ主義
北斎の怒濤の中に富士が浮き
若し口がきけたら海も空も怒る

心の灯ともす日本語あたたかし
頭の中に棋士盤面をいつも持つ
ストライクなどとみかんを一つくれ
文学の峰漱石がまだそびえ

ネクタイが男に彩をつけてゆく
三寒四温人を殺さぬ神の知恵
人生という問題がとけて逝く
科学きびし兎の住まぬ月にする

詩に歌になる雨が降る城ケ島
シテワキは来ず生涯をツレで生き
春眠暁をおぼえはじめ古稀
永遠の平和座像の差した指

本の好きな虫か頁の中で死に
柿右衛門子規凡柳も柿が好き
縄文の文化の知恵を竹のヘラ
神の知恵無限指紋を皆ちがえ

あくこともなく生涯を米の味
はじめましてから人の世の幕があく
温故知新それは川柳かも知れず
わが道に皆伝はなし十七字

富士厳然いく万べんの初日の出
箸拝むくせは生涯持ってゆく
川柳を引けば世に我れ何もなし

我が生くる幸志高の地由布の天

内藤凡柳　略歴

明治三十四年　別府市生まれ（本名・喬木）
大正六年　大阪で井上剣花坊に師事
大正八年頃　川柳「番傘」所属、
　岸本水府直門第一号
大正十三年　帰郷
昭和五年　別府番傘川柳会創立
昭和七年　大分番傘川柳会設立
　大分新聞に川柳壇新設
昭和四十三年　大分県番傘川柳連合会
　設立
昭和四十四年　阿蘇くじゅう国立公園内、志高
　湖畔に句碑建立
　『我が生くる幸志高の地由布の天』
昭和五十三年　川柳作句六十年、七十七歳
昭和五十四年　句業六十年記念句集『人間』上
　梓（毛筆直筆千句）
平成元年　東京都で逝去、八十八歳

（かたちは心であり、心はかたちになる■大分の素老人）

「哲学爺い」の時事放談（７５）

祖蔵　哲

共同体病の哲学

先月7月26日からパリでオリンピックが開催されている。連日の中継で一般ニュース情報も遮断され大いに迷惑である。しかし、国際紛争や戦争が続くこの時期の国際的大会には常に何かの危険を伴う。案の定、前日に高速鉄道 TGV を狙った同時多発的な放火事件が発生した。今のところ犯行声明などは出ていないが、マスコミは「極左集団」によるものと推定している。これは7月上旬のフランス国民議会（下院）総選挙後の左派連合政権樹立へ向けての政治体制急変にむけての懸念の一つでもあろう。さて、前回の東京オリンピックと同様にパリでの大会も問題が多く出てきている。国力を競うようなオリンピック開会式イベントは今回も失態が続出している。例えば、韓国選手団を北朝鮮の国名と間違えたり、南スーダンの入場時にスーダン国歌を流したりている。そして、大会初となる野外でのパレードでは生憎の大雨のため観客が激減していた。中継映像ではうまく隠されていたが実態は悲惨であったらしい。大失態が続いたあの東京大会よりひどいという評判が流れはじめている。日本としてはこの評価をどう考えたらよいのやら。

オリンピックは平和の祭典のはずである。しかし、それはずっと理念という看板であり続けているし、実態はそれを悪用した商業主義である。オリンピック憲章ではメダル獲得数の国別争いを禁止している。それにも関わらず国別の獲得数はニュースに頻出する。近代オリンピックは国家間の争いをなくすためにできたスポーツの祭典であり、国家競争ではない。にもかかわらず、商業資本は国家と結びつきグローバリズムを進める。不正と金まみれのオリンピック。そして国民はナショナリズムに向かう。

さて、毎日の異常なオリンピック報道のため一般のニュースは消し去られており、重大なことがスルーされている。在日米軍が「統合軍事司令部」を発足させ実質的に日本の自衛隊をその指揮下に置くという。国会では何も審議されず、国民にも詳しく説明されず恐ろしいことが秘密裏に進められている。また、イスラエルはイラン訪問中のハマス最高幹部を暗殺した。明確な国家主権の侵害と国家テロ行為。このような異常な状態で「平和の祭典」が続いている。それが皮肉を通り越して「日常」になってきているところに世界の異常さを感じるのは私だけであろうか。さて、今や異常が日常になっている国家の代表、アメリカでまたもや事件は起きた。

（1）繰り返される異常の日常

7月13日、２０２４年大統領選挙の共

和党の指名候補者のドナルド・トランプが、ペンシルベニア州での選挙集会中に銃撃され負傷した。奇跡的に助かったトランプは拳を星条旗にかざしてポーズを作り、有権者の喝采を浴びた。その後の会見では驚くことに、トランプは自らをリベラリストの犠牲者と語り犯行は左派の仕業であり、自らは神の守護者であるというような事を語りだした。まるで犯行は民主党が仕組んだものと言わんばかりの勢いである。現在も裁判中の連邦議会議事堂の襲撃を扇動した同一人の発言とは思われない。

一方で、事件を起こした容疑者が、イデオロギーのために犯行を行ったのかどうか、疑問が出ている。米メディアでは報じられた同級生の証言などを集め、彼がいじめに遭い、「高校で乱射事件を起こしそうな生徒」だったことを伝えている。活動家ではなく、「いじめられ者」で「余計もの」だったのではないか、と。特にSNSが誤情報を拡散しやすい現代は、思想性がある活動家と、社会に対して鬱憤を晴らしたい犯人とが混同されやすくなっている。また、これらを政治が利用する。

（2）共同体―国家

そもそも、アメリカは英国からの宗教難民によって成立した移民国家である。その地にはすでに原住民がいたが、強制的に排除し開拓していった。その過程では徹底した自由があった。有り余る土地は原住民から全て取り上げたので仲間同士の争いはない。力の強いものがすべてを得る強者の社会が出来上がる。しかし、歴史が流れ時代が経過すると開拓すべきフロンティアは無くなる。そこで国外へそれを求めるがやがてそれも限界になる。その結果が現在のラストベルトに代表されるかつての繁栄を取り戻そうとする「忘れられた層」である。彼らは既得権を妬み、攻撃する。そして、自らも移民だったことを棚上げし人種を限定した移民の受け入れを拒否する。しかし、その裏にはかつて自分たちだけが、またあの状態に戻りたいというノスタルジアだけがあり、そこにはイデオロギーは見られない。

そういう意味でアメリカの国家共同体の原点はゲゼルシャフトである。テンニース（1855年・1936）は、人間社会が近代化すると共に、地縁や血縁、友情で深く結びついた自然発生的なゲマインシャフト（共同体組織）とは別に、利益や機能を第一に追求するゲゼルシャフト（機能体組織、利益社会）が人為的に形成されていくと考えた。ゲマインシャフトでは人間関係が最重要視されるが、ゲゼルシャフトでは利益面や機能面が最重要視される。

（3）忘れられた共同体への回帰

アメリカは目下、新自由主義の先鋒である。これは利益中心社会、つまり国家を利益追求の手段としてしか見ない集団である。しかし、人間には本来性として同胞や血縁、家族愛、隣人愛も備わっている。競争だけでは生きられない、どこかで疲れ、落伍者も出てくる。ここで再び人間はゲマインシャフトを求めるようになる。これらはまた現在のトランプ支持者の大半を占める気持ちであろう。

しかし、この忘れられた共同体にも問題が出てくる。それが、内部にもつ異物である。共同体は当然のごとくその構成員に同化や服従を求める。けれどもこれになじめないものは排斥され「余計もの」となる。ただし、これらの者は共同体外へ排除されるのではない。そんなことをすれば、外部でその者たちが団結し当の共同体に集団で反逆するかもしれないからである。「余計もの」は内部に押し込められる。それらは被差別者となり分断され少数単位で管理されて生活することになる。これが差別社会、階層社会のはじまりである。

（4）身体としての国家共同体

17世紀、英国の政治哲学者、ホッブズは人間の原始状態を「万人の万人に対する闘争」であるとし、この混乱状況を避け、共生・平和・正義のための自然法を達成するためには、「人間が天賦の権利として持ちうる自然権を国家に対して全部譲渡するべきである。」と述べ、「社会契約説」を説いた。従来の王権神授説に代わる絶対王政を合理化する理論を構築した。ホッブズはこの国家を旧約聖書の人間の形をした海の怪物「リヴァイアサン」に例えている。教科書でも見られるこの本の口絵に描かれている王冠を被った「リヴァイアサン」は政府に対して自らの自然権を譲渡した人々によって構成されている。これ以後国家はしばしば人間の身体として語られるようになる。

身体としての国家の頭部は、人間の脳に相当する。それは国家自身を制御する「支配権」を表す。一人の王や独裁者であれば絶対主義国家になるし、それが「法」であれば民主主義国家にもなる。そして、心としての精神は国家有機体説にみられるように個々の細胞つまり個人は全体のためにあるという全体主義、天皇主義国家の根拠にもなる。

人間の細胞が常に生まれ変わり変化しても全体としての統一性が失われないのと同様、国家としての身体は個々の国民が生死を繰り返しても、全体としては永遠の生命をもつ。そしてこれが国家としての魅力でもある。個人は滅んでも永遠の生命は存続するのである。個人が国家に忠誠を誓うのはここに秘密がある。

（5）統合失調症化する国家共同体

昨今のインターネット空間でつながった世界は国家身体論に対して変化を及ぼしてきている。身体的国家の構成員であ

る個人同士が直接に互いに結びつき、国家の頭を経由せずに意思を交換する状態である。このような異種の国家に生まれるのが「陰謀論」である。陰謀論はトランプを支持するグループが信奉するQアノンで有名である。現在の世の中はすべて影の政府が動かしており、報道されるニュースはすべてフェイクだと言う。そしてトランプがその世界を救うという単純な物語である。しかし、これがSNSなどで拡散されるや一挙に「変化」する。あたかも単純な変化が繰り返されると「突然変異」が起きるように。そして、この症状はかつて精神分裂病と呼ばれた、「統合失調症」によく似ている。

統合失調症は、自分が他者からコントロールされていると考え、思考、知覚、感情、言語、自己の感覚、および行動における他者との歪みによって特徴付けられる症状を持つ、精神障害の一つである。他者から制御されている状態というのは、自己というものがなく、時間的、空間的に一人として統一されていないということである。この状態が今、国家共同体レベルで起きているのである。そして全世界がこの病に罹りつつある。

大峯奥駈道（８１）

下村　嘉明

体験型人間学　３１

冬の寒さより夏の強烈な暑さが身体にこたえる。7月中頃から8月の盆頃まで強い日差しが路面に容赦なく注ぎ込む日は、４０度を超えていると感じる。私は警備で安全誘導を行っているから、路上に立ち尽くさないといけない。一日立っていると非常に疲れる。太陽の光が身体を疲労させるのだ。

家に帰り風呂に入り水をかぶり、冷や麦かそうめんを焼酎の水割りで流し込み寝る。家に帰り寝るまでは1時間ほどで、とにかく早く寝たい。朝は早く目が覚め朝風呂に入りこわばった腰を温め服に着替える。炊き上げた一合の飯の半分を朝飯、残りを握り飯にする。テルモスにスポーツドリンクの粉末を入れ冷蔵庫から冷水を取り出して氷も併せて入れる。凍らしたペットボトルを2本ばかり袋に入れる。

灼熱の路上は、容赦のない戦場だ。車に乗っている人は、冷房で涼しいが、私たちを守ってくれるものはない。私は、冷えたボトルをポケットに差し込み、塩飴をなめながら一日が始まる。人員に余裕があるときは、休みをこまめに取るが、いないときは頑張るしかない。ポートアイランドのコンテナー埠頭の造成地に行ったときは、大型重機が走り回る中での誘導だったが、周りには日陰らしきものは、一切なく照り付ける太陽の中で仕事をした。

夏場を経験するのは、三度目だが、毎年熱くなってきている。これ以上熱くなれば、熱中症になり仕事にならない。同僚も熱中症になり頭を手術したと聞いた。

ボケ老人の雑記（その４）

明石　幸次郎

先日、元いた会社の後輩S君から電話があり友人の事で相談があるというので、暑い中、難波まで出て行きました。事情はあらかじめ電話で聞いていたが、S君は今年６０歳で役職定年を迎え、今は子会社に転籍になり、６５歳までは、雇用は保障されているが、給料は今までの６０％以下になるようで、会うなり「S君、アンタも６０歳か、定年やなあ、俺も歳をとるわなあ！」と話を始めました。

私の時も、６５歳まで雇用を延長すると言う制度はありましたが、私は自分のキャリアが生かされず、年下の上司に気を使い、働かしてやっている感を周りから出されると、しんどくなると思い、５７歳で自主的退職（自分では自主的リストラと言ってました）をして、S君も当時の私の会社内での事情はよく知っているし、今はいのちの電話のボランティアもしていると言うことも誰から聞いていたこともあり、友人の問題の相談者として適任やと思い、久しぶりに電話させてもらいましたと言うこと言ってから「ところで、電話であらかじめ事情を言いましたが、私の大学の友人が６０歳で会社を完全に辞めてしまい、自分で探した会社も向いていないと直ぐに辞め、今は家にずっと閉じこもって鬱状態で何もしていません。会って話をしようと言っても、暑いし、出て行く気力がないので、電話がするのが精一杯やと、長々と元いた会社の上司の悪口や、自分がやった仕事の自慢話、その頑張ってやった自分が余り評価されず、６０歳前に子会社に出され、そこを1年足らずいたが、年下の上司からあれこれ、指示され、こき使われて、給料も半分近くになったが、とにかく、年金が出るあと5年位は頑張ろうと思ったが会社に行く気力がなくなり、退職願いを出して、止めてしまったようなんです。これからの自分の生き方が分からないので、どうしたものやら」ということでした。「まあ、それは電話で聞いたが、彼の悩みは仕事をしなくなり、家でも何もしなくなったので鬱状態になったというが、それだけではないのでは？６０歳で仕事をしなくなりずっと家におられたら、奥さんはしんどくなるんと違うか！」

Ｓ君は「そう言えば、電話で話をした最後の方でこちらから、奥さんはどうしているんや？　と聞いたら、自分がしんどい、しんどい、人生終わりや、死にたいとよく言っていたので、私もしんどいわ！とこの前、家を出て行ってしまったと。俺もこの歳になり、定年まで一生懸命家族の為に働いたつもりが、何でや？家族に逃げられてしまい、情けないわ。お前にこんな恥ずかしいことを聞いて貰ってもどうしようもないがなあ、俺も終わりや」と言っていましたが、どう慰めて良いのか分からずに、彼の言うことにずっと聞いていました。友人の元気で、会社で頑張っている頃の姿を知っているだけに、落胆してずっと沈んだような声を長く聞くのはしんどいですね。どうなんですか、私には死にたいとは言いませんでしたが、家族には言っていたようで、それに対して何か適切な言葉を言えなくて、聞くだけで良かったんですか？それと奥さんのことを聞いたのは拙かったんですか？「まあ、良かったと思うで。彼は聞いて貰うだけで、しかも君が彼を否定的に話を聞いていないだけに、彼にしては君は自分の事を理解というかまあ、自分のしんどさを分かってくれたと思ったんではないかなあ？電話の最後の方の声はどうやった？」「声ですか？　そうですね。最初の頃は今、言いましたように、沈んだしんどそうな弱弱しい声でしたが、最後の方は、奥さんの事を話して、こちらが、同情的に聞いていたこともあったのか分かりませんが、正直言って、苦しんでいる友人をほって逃げてしまう家族も冷たいなあ？　と思いました。それを、彼に同情的に伝えたことで、その後の彼の声は違ってきましたね。そう言えば、少し元気な声になりました。しかし、電話を終えた後、彼が一人になってしまったので死ぬかもしれないと思いましたので、これから、彼に対しどうしたら良いかと？　悩んでいるんですが」「そうやな、今は年金も６５歳からしかでないのや。俺の時は６０歳からでたからなあ。出るまでの３年をどうするか、辞める前に、一応、女房に相談して何とかなるようにすると、安心させたからなあ。女は定年後の経済的な事が一番心配になるもんで、あとの心配は自分と子供と親、最後が旦那のことや。君の友人は奥さんに事前に辞めることを相談せず、まあ、言っても反対されるので、言わなかったかも知れないが、それがまず間違いで、次に６５歳までの生活費をどうするかも奥さんに話をしていなかった？俺も偉そうなことは、言えないが、そこが欠けていたんやろね。奥さんにしたら、年金が出るまで、どう生活費が確保出来るか、旦那はそれまで、何らかの収入を得てくれるのか？奥さんはそれが一番の心配事や！　その心配事をきちんと説明して、少しでも理解してもらい、生活の目途が立つようにしなければ、安心できないわな。何をわがままな言うて、家にずっといて、しんどい、しんどい、死にたいなど言われたら、最初は、まあ、６０歳まで働いて頑張ってくれたと思って多少は感謝の気持ちを示しても、人生１００年、先が長いで、ずっとこの人とこれからも人生を共にするのかと思うと、嫌になるのでは？定年離婚が多いのも、男が見限られるケースが多いやで。そのことに友人がどう気づいて、どう奥さんに謝罪して、これからの生活を自分なりにどうするかを説明し理解してもらわないと、奥さんは戻ってこない。戻って来たとしても家庭内離婚で、面倒は一切見ませんと言われるやろうな」「先輩！　そしたら、彼にこれからどう接して行ったらいいのですか？」「まあ、少し時間をおいて、定期的に調子はどうや？　ごはん食べているか、しんどいけど、毎日少しでも外の空気を吸って歩いたら、欝は歩いたら良くなるで！などと声かけをして、君のことを心配して、気に掛けているよと自然体で接することや。それと、調子が良ければ会って話を聞かせてくれと手を差し伸べるようにしたら。それと働けないという点で問題になっているのは、しょうもない自分のプライドやな。俺も会社を辞めてから、再就職のため色々な会社に履歴書を送り、面接までしたが、６０歳近くの歳になれば、前の会社でのキャリアが何やと言っても外資系ならいざ知らず、自分がこうしたああしたと言ってみても、そうですか？　で終わってしまう。要は、汗水たらして体を動かして働けますかが大事なことで、その時に、分かりましたと言えるかどうか。まずは、働いて金を稼ぎ、同時に家では掃除、洗濯、食事、かたづけなどの家事を自分でやって行くことやね。要は生活者として自立、自活出来るかやね。そして、家以外に自分の居場所を見つけることやね。それが、人の役に立ちそうなボランティアならば、それに越したことはない。それが出来ると気持ちに余裕が出る。そしたら、奥さんも戻ってこられるかも分からんで！Ｓ君、アンタも６５歳なれば、会社からおさらばされ、その後の人生も長いで。今から考えて、それを実行していた方が、良いで。特に対奥さん対策やね。まあ、その辺は、君はしっかりやっていそうやから大丈夫や」

ということで、後輩の相談事は終了しました。

　それにしても、私は年金が貰えるまでの３年はどうして稼いでいたかというと、優秀で目にかけていた後輩が仕事を持って来てくれましたので、何とか、食いつなげられました。その結果、Ｓ君の友人のような苦しい事態は回避され、今に至っていますが、私の過去を思いださせて、他人事の悩みのような気がしなく、ついつい、後輩への助言に力が入り、ボケ老人は一人反省する次第です。

オクラの山たより（９５）

困了生

一

樋口一葉の父親である樋口則義が身重の古屋家の娘たきとともに甲斐国山梨郡中萩原村を飛び出して江戸に向かったのは一八五七（安政四）年四月六日のことでした。則義は二十七歳、妊娠八ヶ月のたきは二十三歳でした。

樋口則義は学問好きであった父親の八左衛門の影響もあって勉学に励み村では秀才の誉れ高い人であったようです。たきの実家である古屋家は則義が手習いに通っていた慈雲寺の近くにあり、則義が慈雲寺に通う間に幼なじみの二人はひかれ合うようになっていったようです。古屋家は樋口家と同じく中農ともいえる家格でしたが、由緒ある家柄でした。樋口家とは少し格が上の家柄でした。愛をはぐくむ二人に起きた事件が則義の父親である樋口八左衛門が村の小前百姓百二十人の惣代として起こした駕籠訴（老中阿部正弘への直訴）事件です。この事件で八左衛門は二ヶ月ほど入牢することとなりました。老村人たちの信頼に応えて行動を起こした八左衛門でしたが、牢から解き放たれて村に帰ってきた彼を村人たちが全員あたたかく迎えたというわけではありません。やはり前科のある者という白い目を向けられることもしばしばあったようです。とくに古屋家はたとえ村のためとはいえ直訴という形で秩序を乱し前科者となった八左衛門に冷たい態度をとり続けました。ましてや愛し合っているとはいえ、八左衛門の息子である則義に自家の長女たきを嫁にやるなどということはとんでもないことでした。

反対が強ければ強いほど燃え上がるのが愛する二人の常です。燃え上がる則義とたきとはもう引き返すことのできないところまで来ていました。たきの腹には新しい命が宿り、傍目にも隠せなくなっていたのです。

村人の信頼に応えて勇気ある行動しても必ずしも村人からリスペクトされる訳でもなかった父親の不遇ぶりをそばで五年間見てきて、村の中にこれ以上いても自分の未来は開けてはこない。しかも、あと二ヶ月もすれば子供が生まれる。よし、村を出よう、と則義は決断します。

この決断を則義が父親の八左衛門に相談していたかどうかはよく分かりません。一説によれば八左衛門は則義が江戸に出て同郷の友人である真下専之丞（もともと八左衛門と同郷の農民でした。刻苦勉励して幕臣となり、五千石の陸軍奉行となっています）の例にならって江戸で御家人の株を買って幕臣となることを望んでいたといいます。

秀才であった則義はたきといっしょに故郷を出奔するにあたってずいぶんとしっかりとした準備をしていました。逃走資金のために、ずいぶん前から少しずつ借銭をして五両ほどの金を蓄え、それでも足りないと考えて家にあった書物百五十冊を七両で売ったといわれています。

この書物はおそらく父親八左衛門の蔵書であったと考えられます。この時代の一両は一杯のかけそばの値段から換算すると今の十八万円ほどだとされていますから、七両は今の百二十六万円です。一冊あたりざっと八千円以上で売れたわけです。百五十冊という本の量もたいしたものですが、ずいぶんと高価な本を多く八左衛門は蔵していたことが分かります。その蔵書の一端は八左衛門が残した蔵書目録から知ることができます。そのごく一部を書名だけで示すと以下の通りです。

「周易伝儀」「周礼」「老子経」「蒙求」「扶桑隠逸伝」「孔子家語」「古文真宝」「白虎通」「荘子」「宇治拾遺物語」「本朝神社考」「唐元韻鏡」「剪燈余話」等です。

漢籍を中心に勉強家であった樋口八左衛門は多分野にわたって数多くの書物を持っていたのです。

以前、一茶の学びについて述べたように近世の農村における識字教育はかなり進んでおり、出版業の発達によって大量の書物が農村の有力者や八左衛門のような学問好きの百姓にまで普及していました。このことが江戸時代で村請制が成立した条件であったと近世史家はいっています。特に村の中で村役人を務めた庄屋・名主層は行政を担う役人であるという実態を持ちつつ、建前は百姓身分であるという不安定な位置に置かれましたが、それだからこそ武士層の文化や生活様式を模倣することで、村の中において一般の百姓との差別化を図ろうとしました。兵農分離に基づく村請制はこのような村役人の存在を不可欠にしたのであり、のちにこの階層に属する人々が「草莽の国学」の担い手となり、島崎藤村の小説「夜明け前」の主人公青山半蔵となっていくのです。

樋口八左衛門は村落内で村役人になれるほどの有力者ではなかったのですが、有力者以上の学識を持った人でした。駕籠訴で失意の人となりましたが、それだけに友人真下専之丞のように武士となって江戸で立身出世していくという夢を息子に託したのかもしれません。私の想像ですが八左衛門は百五十冊の書物を「これを売って逃走資金にせよ」と指示したという可能性は否定できません。

ともあれ一八五七（安政四）年四月六日、則義とたきの二人は十分な準備をしてうえで十二両（二百二十万円ほど）の金を懐に江戸へ向けて出奔します。この一葉の両親の行動はこの時代には珍しい自由恋愛、自由結婚の実践者であったことは確かでした。

二

則義とたきの目指すは江戸。甲斐国山梨郡中萩村から江戸に向うには大菩薩峠をこえていく旧青梅街道を進むのが一般的なのですが、このコースは難点がいくつかありました。まず大菩薩峠の麓には番所がありました。さらにこの峠は旧青梅街道では一番の難所と言われるほど坂が急峻だったので妊娠八ヶ月のたきといっしょではどうしても早くは進めません。それで二人は大菩薩峠を避けて御坂峠をこえ、山中湖畔を進み、小田原を経て江戸に出ました。一般的な大菩薩峠声を避けた他の理由として古屋家の追っ手を恐れての逃走ルートだったとも考えられます。この点でも則義は計画性のある冷静な男であったことがうかがわれます。

故郷を出た二人が江戸に着いたのは四月十三日。その翌日に揃って九段下の真下専之丞を訪ねています。父親の八左衛門の友人であった真下は二人をあたたかく迎え、則義の勤め先が決まるまで自宅に起居させました。翌週には江戸城の奥医師喜多村法眼安正の手伝いで医学書の印刷に関わる仕事が見つかり、小石川に則義は一家を構え、ここに江戸の樋口家が生まれます。それから一ヶ月半後にたきは無事に女の子を出産します。江戸の恩人真下専之丞の妻の名前をもらって、その女の子は「ふじ」と名づけられました。

このたきの出産は二人にとって大きな転機でした。出産直後の女性にしかできない仕事がたきに回ってきたのです。乳母奉公です。二千五百石取の旗本稲葉大膳正方の養女の鉱に生後六ヶ月の子があり、その子の乳母が求められているというのです。給金は年三両、仕着せ料一両、里扶持一分一朱。さらには四ヶ月後の九月からは半年間、一分二朱が与えられ小遣いも二百文ということでした。研究者によれば同時期の大工の賃料で換算すると一両は三十～四十万円相当だそうですから、高給というわけではないですが、住み込みで衣食住に一切お金がかかりませんから、一定以上の蓄財ができたことでしょう。

また、たきが乳母に出るために生まれたばかりの長女ふじは市ヶ谷の若夫婦に里子に出され、則義は小石川の家を引き払って再び真下家に居候ということになりました。それも武士になるために御家人の株を買うための資金を蓄えるためであり、将来の立身出世のためには現在の家族の幸せを諦める。則義は計算高く冷酷といってもいい男なのでした。

三

則義はその後、蕃書調所に勤めていた真下専之丞のもとで小使として働き、海外事情にも触れ、幕末の江戸城内の緊迫した状況を見聞きすることになります。時代の大きな変わり目の時期でしたが、それを自らの出世の手がかりとすべく骨身を惜しまず、則義は働きました。翌一八五八（安政五）年九月、一年間、大坂に大番組与力の従者として赴任します。その任務が無事に終えて江戸へ帰ってくると勘定組頭菊池隆吉の中小姓の仕事が待っていました。給金は四両一人扶持。口の悪い江戸っ子が身分の低い武士を馬鹿にして「さんぴん」と言いましたが、それは「三両一人扶持」の「三（さん）」と「一（ぴん）」からきたものですが、まだ、武士にもなっていなかった則義は「さんぴん」よりは少し上の待遇を得たということになります。四両一人扶持は現在の円で換算すると約三百万円。悪い給金ではありません。

収入も安定した則義は菊池家の中にあった長屋でたきと二人が暮らすことになりました。一八五九（安政六）年十月のことです。のちに一八六三（文久三）年には七歳になっていたふじを引き取って家族三人で暮らすようになります。

おもしろいことに武士となることを目指していた則義は市ヶ谷の試衛館で天然理心流の剣術を教えていた近藤周助に弟子入りをします。近藤周助は近藤勇の養父であり、この道場には土方歳三、沖田総司ら後に新撰組で活躍する若者たちが集まっていました。近藤も土方ももとをただせば農民であり行商人でした。一生懸命に彼らが剣を学んだのは則義と同じで、彼らも武士になろうとしていたからです。しかしながら、新撰組に集った人々と違い、幸いなことでもありますが、則義は剣の道はからきしダメでした。それならばと彼が目指したのは筆で立つ文官としての武士の道でした。道場通いはいくばくもなくして止めてしまいました。思えば江戸で世話になった真下専之丞も仕えた菊池隆吉も幕府内で頭角を現わしスルスルと出世しましたが、武（剣）の才能ではなく頭脳の冴えを評価されてのことでした。すでに述べたように真下は陸軍奉行にまでも至り、菊池は外国奉行そして勘定奉行を歴任することになります。当然、その公用人であった則義の待遇もあがっていき、長男泉太郎が一八六四（元治元）年に生まれ、次男虎之助が一八六六（慶応二）年に生まれました。樋口家の前途は洋々たるものに則義には思えたことでしょう。

四

しかし、翌年の春、青天霹靂というのでしょうか、則義にとって思ってもみなかったことが起きました。則義が仕えていた菊池隆吉が急に表だった役職すべてから退いてしまったのです。もちろん、則義は失職となります。彼は三十七歳。江戸へ出て来て十年の月日がすでに経っていました。

このとき則義・たきの夫婦が貯めてい

た金は百七十両になっていました。則義の願いは同郷の人で一介の農民から武士となり幕府の重臣となった真下専之丞と同じ道をたどることでした。それにはまず真下がそうしたように御家人株を買って正式な武士にならねばと則義は行動を起こします。

当時、公然としたものではありませんが、御家人の株は「与力千両、御徒士（おかち）五百両、同心二百両」というのが相場とされていました。同心株なら何とかなりそうですが、それはあくまでも株の値段のこと。御家人の株を売る側にはそれ相応の生活難があり、その家を受け継ぐということは、その家が抱えていた負債もすべて受け継ぐということでした。

また、百姓という身分から武士のそれへと変わるためには武家の養子にならねばなりませんでした。武士の家を継ぐ者は武士の子でなければならぬというのが身分社会の鉄則です。それで自分が武士の血を引く者であるということを証明する「親類書き」を作らねばなりませんでした。この作成には真下の協力のもと多くの武士に協力してもらい、生まれた土地から親類関係に至るまで武士の流れであることを則義はみごとにデッチあげました。ただし、協力してもらった人には相応の「付け届け」が必要であったことはいうまでもありません。

すでに蓄えていた金とあちこちで借金してこさえた資金で則義は南町奉行配下の同心浅井竹蔵の養子となり、浅井家の家と役職を継ぎました。給金は三十俵二人扶持。これに八丁堀の拝領屋敷もついていました。

こうしてやっと則義は晴れて念願の武士に、それも幕臣、「天下の直臣」になることができました。一八六七（慶応三）年七月十三日のことでした。

参考までに則義が「天下の直臣」になるためにどれほどの金がかかったのか、彼が書き残した記録からみてみると、

同心株…百両
浅井家の負債の肩代わり…約三百両
その他、付け届けなど…数十両
計　四百数十両

同心株自体は相場の半額で安くつきましたが、それ以外に負債もふくめて多額の出費となり、手持ちの金は百七十両ほどであり、不足した二百五十両は借金となりました。それでも同心を地道に勤めていけば、また新たな実入りもあるだろうし、真下専之丞のように出世のチャンスもあるでしょう。同心になったばかり則義に未来への不安はなかったと考えられます。

しかし、同心となって三ヶ月後の十月十四日に考えもしなかったことが起きます。大政奉還です。十二月十九日には王政復古が発せられ、江戸幕府は廃止、当然のことながら則義の役職も消滅します。わずか半年ほどの直参の武士でした。

樋口一葉が生まれるのは一八七二（明治五）年三月二十五日。幕府が瓦解した後の三人の子を抱えた則義・たき夫婦の奮闘は続きます。その詳細は次回です。

隠された歴史（７０）

満田　正賢

韓国の全羅南道の光州近くにある栄山江流域に北部九州様式の前方後円墳が多数存在していることが明らかになっています。そして発掘の結果、この北部九州様式の前方後円墳は五世紀後半に突如として造られ始め、六世紀初頭に突如として消滅したことがわかっています。その理由は何か。また日本書紀・継体紀には五一二年～五一三年に倭国によって任那四県が百済に割譲されたと記されていますが、その理由は何か。さらに三国史記新羅本紀では四〇二年に倭国と国交を結んだ後、四〇五年から五〇〇年まで倭国からの侵犯記事が継続し、その後倭国関連記事が途絶えていますが、その理由は何か。私はそれらの理由に倭国の王朝交代が関係していると考えています。

私は、この「隠された歴史」の連載の中で、倭の五王から筑紫の君磐井へと続いた前期九州王朝を近畿勢力の王となった継体が滅ぼし、その後宣化の嫡男が那津官家に遷都して後期九州王朝を建てたとする仮説を立てました。その仮説に立つと、この時期に朝鮮半島に起こった変化の説明がつきます。今回は、倭国の王朝交代と任那の滅亡に焦点を当ててみたいと思います。

まず、出発点となるのは、「隠された歴史（１２）」で紹介した、三品彰秀氏の「継体紀の諸問題―特に近江毛野臣の所伝を中心として」（日本書紀研究第二冊所収）の内容です。三品氏は、日本書紀研究会を創設した、日本書紀研究、特に継体紀研究の第一人者です。この三品氏の考察はこの時期の朝鮮半島の動向を探るうえで重要です。

まず、三品氏は継体紀朝鮮半島記事（問題）をグループ分けしました。（＊括弧内は継体〇年条を指します）

A群記事：任那四県の百済への割譲問題で、穂積臣押山が主役を演じている。（六年）

B群記事：己汶、帯沙に対する百済、伴跛両国の競望事件で物部連がその処理に当たっている。（七年、八年、九年、十年）

C群記事：近江毛野臣の南加羅復興経営（二十一年、二十三年、二十四年）

D群記事：加羅国の動向（二十三年、二十四年）

そして、A・B記事群とC・D記事群

に関して三品氏は、「A群とB群は六年か十年にかけて連年に記載され、C群とD群とは二十三年二十四年にわたって記載されており、かつA・B記事群とC・D記事群とは相互に内容的に連絡するところがあるにもかかわらず、その間に十年余の空白期間があって年代記としては不調和な感を起こさせる。この年代記的空白は「書紀」編纂の際に同一事件に関する別な資料の取り扱い、およびそれの年次的配慮の不手際から生じたものである。」と考察しています。

そして三品氏は、日本書紀撰者の錯覚による加羅諸国の動向の二重記載、及び、任那（南加羅・金官国）滅亡に関する日本書紀撰者の錯覚と作文について考察しています。＊具体的な内容は「隠された歴史（12）」をご参照ください。

考察の結果として三品氏は、任那地域をめぐる歴史を時系列的に以下の流れであると捉えました。

A：任那四県の百済への割譲。（上哆唎・下哆唎・娑陀・牟婁）なお、翌年百済に己汶・帯沙を与えている。

B：伴跛を代表とする加羅諸国の反発。

C：南加羅（金官国・狭義の任那）の中に新羅の併合に内応する動きが起こる。

D：新羅による南加羅併合を阻止するため近江毛野臣を唯一日本の影響力が残る安羅に派遣する。

E：新羅と対峙した近江毛野臣の退却（敗北）により新羅による南加羅（金官国・狭義の任那）の併合が確定。

F：加羅・新羅通婚の件はまったく別の、新羅記に記された高麗加羅（大伽耶）と新羅間の動向である。高麗加羅（大伽耶）は新羅法興王時代には新羅と親交関係を保っていたが、新羅真興王時代に交戦関係に変わり、最終的には新羅に討伐された。

朝鮮半島の動向は、年代がわからないまま加羅各国の動向がごっちゃになって日本に伝わっていました。それをすべて任那（加羅）の動向として単純化し、関係の無い磐井の乱の記事もそれに関連させて、継体二十一年・二十三年・二十四年条に押し込んだというのが三品氏の見方です。

そして、三品氏は、このようにまとめています。

「継体紀の記事の大部分が朝鮮半島関連記事であるが、そこに見られるもっとも注意すべき特色は、近江毛野臣の一連の記事の中に、伊叱夫礼智（いしぶれち）干岐（三国史記の列伝に異斯夫として記されている）などの朝鮮の地名・人名用字を用いた朝鮮側史料記事と、あきらかに日本側の所伝と思われる河内馬養首御狩などの記事を巧みに組み合わせていることである。これを欽明紀と比較するに、欽明紀も朝鮮関連記事が大部分を占めている点では継体紀と同じですが、欽明紀の朝鮮半島記事のほとんどが百済系の文献を一辺倒に利用している点で、継体紀とはその趣を異にしている。」

さらに三品氏は、磐井の乱の年次は作られた可能性があるとして、このように述べています。

「筑紫の君磐井の反乱のことは（中略）近江毛野臣の加羅派遣と連関されて（中略）二者の関係を叙述している。もちろん『書紀』撰者の作文するところであるが、（中略）磐井の反乱は『古事記』の所伝のように、継体の御代のこととして古くから伝えられているだけで、年次の如きはもちろん不明の所伝である」

従来の磐井の乱の評価は、磐井の乱が継体二十一年（五二七）から継体二十二年（五二八）にかけて起こったものであることを前提にして議論されてきましたが、磐井の乱が継体紀の年次以前に起こった事件であると想定すると、この時代を読み取るうえでの自由度が増します。

私はこれまで紹介した三品氏の考察を踏まえ、倭国の王朝交代と任那の滅亡に関して次のような仮説を立てました。

一．倭の五王から磐井に続く前期九州王朝は積極的に朝鮮半島に進出しており、任那・伽耶諸国を支配していた。百済とは四七五年（蓋鹵王二十一年）の漢城陥落以降、半支配的な関係を築いていた。又、新羅へは頻繁に国境侵略していた。

二．継体が近畿勢力の王となった。　五〇七年（継体元年）

三．近畿勢力の王となった継体はすぐに前期九州王朝（倭の五王に繋がる磐井王朝）を侵略した。　五一〇年前後

＊日本書紀では、磐井の乱は継体二十二年の出来事と記されていますが、三品氏の指摘の通り磐井の乱の年次が不明であるとすると、近畿の王となった継体は、倭国王（対外的に日本を代表していた前期九州王朝の王）の地位を奪う行動をいち早くとったことが考えられます。

四．継体は、近隣諸国に倭国の王朝交代を認めてもらう目的で百済に擦り寄り、任那の四県割譲と引き換えに、百済に倭国王として認めさせた。百済は倭国との対等的な関係を築くことが出来ることでこれを歓迎し、百済と継体（後期九州王朝）との蜜月的な関係が生まれた。　五一二年～五一三年（継体六年～七年）

五．前期九州王朝と親密な関係をもっていた任那・伽耶諸国は新しい倭国王（継体）と百済に反発した。五一三年～五一六年（継体七年～十年）

六．継体は倭国で初めての年号「継体」を立て、王朝交代を宣言した。　五一七年（継体十一年）

＊「隠された歴史（5）」などで紹介した九州年号の始めは、それを記す多くの書物が継体十六年（五二二）に

作られた「善記」という年号だと記していますが、九州年号をもっとも正確に記載しているとみられる「二中歴」だけは、継体十一年（五一七）に作られた九州年号の「継体」が年号の始めだという立場をとっています。

「継体天皇」という漢風諡号は天平宝字六年（七六二年）～同八年（七六四年）に淡海三船が他の天皇の漢風諡号とともに一括撰進したとされています。しかし継体は継体二十四年二月条にある詔の中で、自らを「継体（ひつぎ）之君」と呼んでおり、淡海三船はこの表現を参考にして男大迹王に「継体天皇」という漢風諡号を付けたものと思われます。そうであれば、「継体」という最初の九州年号も継体（男大迹王）が自らの呼び名にちなんで名づけた可能性が強いと思われます。

七．南加羅（金官国・狭義の任那）の中に新羅の併合に内応する動きが起こる。　五二〇年前後

八．南加羅の新羅への併合を阻止するため近江毛野臣が派遣されたが敗走し、南加羅の新羅併合が決まった。五三〇年（継体二十四年）

九．豊前国に逃げて身を隠していた磐井が葛子等一族とともに殺害された。五三一年（継体二十五年）

＊筑後国風土記逸文（釈日本紀）は、磐井は勝ち目のないことを悟って、豊前国上膳県（上毛郡：現在の福岡県築上郡南部）に逃げたとする古老の話を伝えています。

＊日本書紀・継体二十五年条に以下の分注があります。

「その文（百済本記）はいう。太歳辛亥の三月に、軍が進んで安羅に至り、乞毛城（こつとくのさし）を営った。この月、高麗、その王安を殺した。また聞く、日本の天皇および太子、皇子、ともに崩薨す、と。」

十．継体の崩御　五三四年（継体二十八年）

十一．宣化の嫡子による後期九州王朝の設立　五三九年

＊蘇我馬子はこの年を欽明天皇元年として天皇記・国記を編纂しました。日本書紀の欽明紀の記事は百済系文献と後期九州王朝の文献を使用しています。

十二．任那・伽耶諸国のうち残っていた大加羅の滅亡で任那が完全に滅んだ。（新羅本紀五六二年）

＊五六二年に相当する日本書紀欽明二十三年条に次のような記事があります。

「二十三年春正月、新羅は任那の官家を攻め滅ぼした。（一本はいう。二十一年に任那が滅んだ。総（体）を任那といい、別々に加羅国、安羅国、斯二岐（しにき）国、多羅国、卒麻（そちま）国、古嵯国、子他国、散半下（さんはんげ）国、乞飡（こちさん）国、稔礼（にむれ）国という。合わせて十国）」この表現は、倭国がこの時点でまだ任那を支配していたという建前での表現であり、実態としては、伽耶諸国は倭国から独立していたと考えられます。

俳句

影山　武司

形代の真白をわれにいただきぬ
富士山に頭を深々と山開
法螺貝の先導で行く登山道
山伏の頭襟きりりと汗光る
心経の声吸ひこまれ夏木立
一輪に白の漲る百合の花
ひたむきにバツト振る音夏木立
朝曇鳥どちの声裏返る
色形みな不揃ひのトマト煮る
一雨で緑の戻る夏畑

編集後記

ＳＫ生

▲芭蕉に「あかあかと日はつれなくも秋の風」の句もあるが、地球温暖化のためかいっこうに涼しくならない。おまけに日向灘の地震で「巨大地震注意」が政府から出された。▲古代の人々は天変地異が起これば深く天の怒りを恐れた。今、地上ではなかなか止められぬ地球環境破壊、うち続く戦争と罪なき人々の大量虐殺。抑圧の政治と貧困に苦しむ多くの人々。これで天が怒らずして何の「怒りの日（Dies irae）」か。そして、この天の怒りは正義の怒りでもあったはずだ。▲かつて哲学者の三木清は「ヒューマニズムとは怒りを知らないことであろうか。とすればヒューマニズムにいかほどの価値があるのか」といった。人々と共に愛を語り合い同時に正義の怒りを共有し合うこと。それを私たちはどれほどなしえてきたのか。はなはだ心もとない。▲三木清は敗戦直後にヒューマニズムのかけらもない獄中で疥癬に苦しみながら死を迎えた。この人にしてこの死。ああ、やんぬるかな、である。▲三木清の死から七十九年が経った。多くの人々とともに愛を語ると同時に怒りをもつこと。それはいかにも難しいことのように見える。しかし、それでもなお、と思うとすれば、どうしたらいいのか。地震と熱中症を恐れつつ、クーラーを頼りに生活する中でしきりと考えることである。

連載 ふみの道草（74）　山椒魚

雨のたび思う抜けたか空の底
今年もそう思ったのも束の間で、
一平米五百ワットに汗も沸く

今度は、「沸騰する地球」に参っている。こうなると、川柳をよく詠む人は、川柳をどのようによく読んでいるかを紹介する旅を続けざるを得ない。

『綺羅星　千代子』

樹木葬さくら舞い散る墓所を買う　遊楽

巻頭に「生と死」を詠った六句を選んだ。墓所を買った経緯に死に対しての悲壮感はなく、一連の句に夫婦のドラマが浮かんでくる。一つの句材を深く詠むのも近詠の作法と思う。読ませる句になった。

早口で九九を諳んじ競った日　敦

随分古い記憶が蘇った。とにかく夢中で諳んじた九九だ。生きていく一生ものの利器だ。あんな日があって今がある。

ブラボーと大きな声で褒められる　裕治

「ブラボーと」、一句の上五で感動の空気が伝わってくる。男女を問わず、年齢を問わず貴重な経験だ。その感動が全句に溢れ伝わって来る投句だった。生きるとはこんなことでしょう。

カーブした手植えの苗の見事さよ　千六

先日、車窓から見事きれいな棚田を瞬間見た感動が浮かんだ。日本人にとって目から入る静かな風景は六月のプレゼント。

一年間、これでごはんが食べられると戦中派は思うのです。

期限切れようかん妻と半分こ　泰光

賞味期限切れの羊羹を妻と半分こ、夫婦の静かな温かみ、半分こがウフフと甘い。

賞味期限が切れている上五の講釈はいらない。

長い旅激流はもう越えました　喜代志
能面の下で強がり言ってみる　喜代志

淡々と二句の語り口。激流を乗り越えて来たからこそ出来る表現。能面の下には、静かな怒り悲しみは口にはしない。能面の下は複雑なのです。

ちかごろは草花たちも友となり　節子

草花と語れば長い物語。道端の野の花たちはやさしい。

とりたて野菜話題を連れてやってくる　静代

土の匂う取り立て野菜が裏木戸から、そのうえ話題までが付いて暮らしが盛り上がる。良し悪しは問わずそんな些細な事を重ねながら支えられて生きて来た。

土の匂いと空気が温かい。

『課題吟「祈る」　談亭』

特選

ノーモアの祈りは永遠に千羽鶴　喜一郎

たくさんの「祈り」の作品をいただきました。どの祈りも届きますように心から念じております。

さて、日本は、先の大戦をふまえ憲法で政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し、恒久の平和を念願すると誓いました。

国民はこぞって焦土と化した日本から今日を復興したことは承知のとおりです。

ノーモアの祈りが永遠に続いていくよう作者の祈りも大切にしなければなりません。

軸吟（選者がその課題で詠んだ自句）

大自然の脅威へ祈る神の加護　談亭

私も一句祈りました。

核なき世一途に祈る被爆の忌

鹿の子百合